

令和6年度 理科 授業改善推進プラン

大田区立道塚小学校

1 昨年度の授業改善推進プランの検証

(1) 成果

- ・授業の過程を「課題、予想、観察・実験、結果、考察、結論」の形式で実施したことにより、学習が深まった。
- ・実物を用いた観察実験を行ったことで、実験に対する意欲が高まった。
- ・実物を用いた観察実験を行った事柄については知識の定着が充分図られた。

(2) 課題

- ・既習事項の知識・技能の定着が不十分な学年がある。
- ・基礎的な知識・技能の定着が不十分なため、活用や思考・表現につながらない。
- ・学力効果測定の問題のような活用力・思考力を問う問題に対して、無答が多い。

2 大田区学習効果測定の結果分析

(1) 達成率（経年比較）

	令和6年度結果	令和5年度結果	令和4年度結果
第4学年	正答率が目標値に対して、11.9ポイントほど下回っている。		
第5学年	正答率が目標値に対して、8.2ポイントほど下回っている。特に、活用の問題に対して、正答率が低い。	正答率が目標値に対して、7ポイントほど下回っている。 (第4学年時)	
第6学年	正答率が目標値に対して、8.8ポイントほど下回っている。特に、記述式で答える問題に対して、正答率が低い。	目標値は下回ったが、達成率は昨年より上昇した。正答率が目標率に対し、2ポイントほど下がっていた。 (第5学年時)	全体的に目標値と同程度である。 (第4学年時)

(2) 分析（観点別）

① 中学年

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
基礎的な知識や活用するための知識・技能が目標値を下回っていて、基礎的な用語や知識が十分に身に付いていないと考えられる。	結果を予想し、考えたことを表現する力が、目標値と比べて下回っていると考えられる。	目標値を約10ポイント下回っていて、無答の児童が多いと考えられる。また、問題の形式に慣れていないことも理由として考えられる。

② 高学年

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
活用するための基礎的な知識・技能の定着は学年により差が認められる。	基礎的な知識が定着できていないため目標値が下回り結果に差が認められる。	実験に対する意欲はあるが、主体的に問題解決に向かう意欲が低い。

3 授業改善のポイント（観点別）

（1）中学年

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
次年度の学力効果測定で区の平均正答率との差を5ポイント以内にすることを目標にする。そのために、観察物等をきちんと用意し、知識を定着する時間を設け、継続して取り組む。	次年度の学力効果測定で区の平均正答率との差を5ポイント以内にすることを目標にする。そのために、問題を児童に考えさせる問題解決型学習を行っていくことで、科学的な思考力を育む。	次年度の学力効果測定で区の平均正答率との差を5ポイント以内にすることを目標にする。そのために、実物との出会いを工夫したり、学習の振り返りを確実に行ったりと主体的に学習に取り組む態度を育てる。

（2）高学年

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
次年度の学力効果測定で区の平均正答率との差を3ポイント以内にすることを目標にする。そのために、実物を用いた実験観察を確実に実施し、学習の知識が定着できるようにする。振り返りの時間を使い、学習した内容を復習する時間を設ける。	次年度の学力効果測定で区の平均正答率との差を3ポイント以内にすることを目標にする。そのために、実験の場面では、予想する時間を確実にもち、児童が考える時間を確保する。単元の終末に、小テストなどで語彙の確認をする。	次年度の学力効果測定で区の平均正答率との差を3ポイント以内にすることを目標にする。そのために、学んだことを学習や生活に生かす単元計画を考え、学習を意欲的に取り組めるようにする。

